

特 集

ドレーンを挿入している こどもの安全を守る看護 熟練スタッフのHow-toを共有しよう

《特集にあたって》

こどものドレーンに関する ケアの幅を広げるために

ドレーンの概念は古代ギリシャやローマ時代に遡り、ヒポクラテスは膿の排出のために金属や植物素材の管を使用していました¹⁾。小児外科医療の進歩とともにドレーンの歴史も進化し、感染予防・低侵襲化・快適性向上を目指し、こどもの解剖学的特性に適応したドレーンに関する技術が開発されてきました。これまでの先人の努力と医療技術の進化によって多くのこどもの命が救われてきたことを考えると、こどもにかかわる看護師として適切なドレーン管理の知識をもつことは必須です。

最近の小児医療に関するインシデント報告²⁾では、「薬剤」「ドレーン・チューブ管理」が上位の2つを占めており、患者影響レベルが3 a以上の報告は「薬剤」が4%と少ない一方で、「ドレーン・チューブ管理」では39%と多くなっています。これは、ドレーン・チューブの計画外抜去に引き続き、デバイスを再挿入するためであり、こどもの身体的苦痛の増大にもなっています。とくに5歳未満のこどもでは、5歳以上65歳未満の患者と比較してインシデント発生率が2.3倍と高く³⁾、こどもの活発な動きや理解度の違いによって、より慎重な管理が求められます。そのため、医療者の適切な対応と、医療者と家族の連携による安全確保が不可欠です。

ドレーンを挿入しているこどもが過ごす臨床現場の看護師からは、「ドレーンの計画外抜去を経験した」「痛みや不快感を読み取ることが難しい」「排液の変化に気づくのが遅れ、怖い思いをした」などの声が聴かれ、また、筆者自身もそんな経験をした1人です。

本特集では「こどもの安全を守る」という視点から、こどものドレーン管理に関する基礎知識や実践方法の解説となるような項目や内容を検討し、専門分野で活躍されている方々の

力添えをいただきました。また、こどものケアを考えるときの基本である成長・発達をふまえた解説であることはもちろん、チーム医療の推進やタスクシフト/タスクシェアについての参考になるよう、こどもだけにかかわらず成人も含めた、ドレーン管理や周術期管理に関連する臨床現場で取り組んでいる多職種の方々にも情報提供をお願いしました。昨今、「働き方改革」が進められていますが、業務の多忙化、苛酷化はなお続くなか、執筆を引き受けていただきました皆様には、心より御礼申し上げます。

熟練スタッフの皆さんがもつ「こどものドレーン管理のHow-to」の共有を通じて、こどもにとって安全でよりよいケアの提供に向け、看護師一人ひとりが根拠をもって実践できるようにすること、そしてそれが看護師の自信につながることを目指しています。さらに、後輩スタッフへの教育の充実・強化を図ることや、チームで新たなケアの形を開発していく一助となることを願っています。

【文 献】

- 1) Adams F: The Genuine Works of Hippocrates. The Sydenham Society, London, 1849, pp 813-822.
- 2) 権守延寿, 稲田雄, 郷間瑞輝, 他: 日本の独立病院型小児総合医療施設の小児集中治療室で報告されたインシデントの特徴と要因. 大阪母子医療センター雑誌 39(2): 8-17, 2024.
- 3) 秋山直美, 魚住龍史, 秋山智弥, 他: 急性期病院における高頻度インシデントに関連する要因; 薬剤・ドレーン・転倒転落に関する観察研究. 日本医療・病院管理学会誌 58(3): 71-81, 2021.

聖隷浜松病院看護部／小児看護専門看護師
一柳雄輔 Ichiiyanagi Yusuke

順天堂大学医学部附属浦安病院看護部／小児看護専門看護師
村山有利子 Murayama Yuriko